

PS-043-2 当科における膿胸治療の検討(膿胸3, 第24回日本呼吸器外科学会総会号)

著者	山本 真一, 佐藤 幸夫, 長谷川 剛, 手塚 憲志, 大谷 真一, 金井 義彦, 手塚 康裕, 遠藤 哲哉, 斉藤 紀子, 遠藤 俊輔, 塚田 博, 蘇原 泰則
雑誌名	日本呼吸器外科学会雑誌
巻	21
号	3
ページ	420
発行年	2007-04-11
権利	日本呼吸器外科学会
URL	http://hdl.handle.net/2241/00134215

PS-043-2 当科における膿胸治療の検討

自治医科大学外科学講座呼吸器外科部門

山本 真一, 佐藤 幸夫, 長谷川 剛, 手塚 憲志, 大谷 真一,
金井 義彦, 手塚 康裕, 遠藤 哲哉, 齊藤 紀子, 遠藤 俊輔, 塚田 博,
蘇原 泰則

【目的】膿胸に対する手術治療として、近年では胸腔鏡手術が選択されており、良好な結果が得られていることが多い。しかし、依然として従来のように開窓術が必要になる症例も存在する。今回我々は膿胸に対する手術方法の検討を行った。【方法】2001年より2005年までに当科で膿胸に対して胸腔鏡手術（以下 VATS）または開窓術など VATS 以外の手術を施行した34例に対して検討した。【結果】対象は男性25例、女性9例。原因疾患として肺炎10例、肺切除術後7例、結核3例、気胸3例、心疾患2例、その他9例であった。術式は VATS 23例、開窓8例、肺葉切除1例、胸膜肺全摘1例、大網充填1例であった。VATS 群23例中21例は1回の手術で治癒しており、肺炎または気胸による膿胸が多かった。開窓群は結核性膿胸や気管支断端妻からの膿胸が多かった。VATS で治癒せず開窓に移行した症例が1例あり、基礎疾患としてアルコール性肝硬変、腎不全が見られた。また、肺癌術後膿胸で2回 VATS を施行した症例が1例あった。周術期合併症として、再膨張性肺水腫により人工呼吸管理を要した症例が2例みられたが、そのほか大きな合併症は見られなかった。【結論】胸腔鏡手術は膿胸に対する治療として非常に有用であるが、原因疾患に応じて術式を選択する必要があると考えられた。